

魔女と長ネギ

2009.01.28

あ、魔女だ！

僕は、思わず 彼女の後をついていった。

夕方のスーパーマーケットの入り口近く。

彼女は、野菜売り場で 長ネギを1本 手にとると、
くるくると バトンのように 片手で 回転させはじめた。

そのまま、野菜売り場を とおりすぎていく彼女を、
買物中の主婦たちは 誰も 気にしている様子がない。

長ネギを くるくる回すの、
主婦の間では 当たり前なのだろうか？

声をかけようか、どうしようか。

偶然とはいえ、彼女と 会社の外で会うのは、初めてだった。

声をかけたいのは やまやまだけど。
あんな 普通の女性のフリをしながらも 実は魔女である 彼女の行動を、
こっそり 見ていたい気もする。

と、そのとき。

あ、あぶない！

僕は 思わず 声を上げてしまっていた。

彼女が、突然 長ネギを回すのを 止めたかと思うと、
そのまま、数メートル先にいる幼児に向かって・・・

ネギを振り下ろしたのだ！

もちろん。
長ネギとはいえ、ネギは そんなに 長くない。

幼児に ぶつかるはずも、ない。

だけど、彼女の目つきの真剣さは、
そのまま 長ネギから なにか'気'のようなものが 伸びて、
幼児に突き刺さるのではないかと 思ってしまうほどだった。

その証拠に……

ちょこちょこと 歩いていた幼児は、
彼女が 長ネギを振り下ろすと同時に、ぺこり、と 転んでしまったのだ。

そして、一瞬の間があったかと思うと、
うわああん! と、大きな声で、泣きだした。

当然だ。
わかっていないかもしれないが、いきなり、魔女に 転ばされたんだもの。

いったい、彼女は なにを考えているんだろう。

僕が あんぐりと 口をあけていると、
魔女が ぐるりと 後ろを振り向き、つぶやいた。

また……見てたの？

あなた、いま、わざと あの子を 転ばせたんでしょう？
どうし……

どうして？

……と 問いかける前に、僕の耳に飛び込んできたのは、
ガシャン ガシャン ガシャン という すさまじい音、音、音。

びっくりして 音の方向に目をやると、
山積みになっていた 特売品のトマト缶が、崩れ落ちていた。

もしも。
あの幼児が、あのまま ふらふら 歩いていたら…

トマト缶の雪崩の下敷きになっていたことは、間違いないだろう。

僕は、ぞっとして 背中をふるわせたが、
彼女は 平気な顔をして、ササミのパックに、見入っている。

あなた、いま、わざと あの子を 転ばせたんでしょう？

僕は、さっきと まったく 同じ言葉を、彼女に向かって ささやいたが、
その意味は、180度 ひっくり返っていた。

彼女は、あの幼児が 事故に巻き込まれるのを防ぐため、
わざと 転ばせたのだ。

…長ネギを 使って。

魔女は、ササミのパックから ムネ肉のパックに 目を移し、
僕の方を見もせず、言った。

魔女はね、忙しいのよ。

魔女は、忙しい。

だから、孫の手も 長ネギも、
魔女の手にかかったら、瞬時に 魔法の杖にされてしまうんだ…

僕は、わかったような、わからないような、
そして なんと言葉を返していいのかも 思いつかず
黙っていた。

そんな僕の目の端で、
白いものが チラチラしている。

目をやると、今度は 魚売り場へ移動している 魔女が、
バトントワリング よろしく
またしても 長ネギを くるくる 回していた。

その細い手首には、なにかが キラキラと 光っていて。

どうやら、先日 見せてもらった クロスのネックレスと おそろいの、
銀のクロスのブレスレットのようだった。

魔女は クロスが お好き、か……。

僕は くるくると回る長ネギを 追いかけようと、左足を 踏み出した。

さきほど魔女に助けられた 幼児が、母親らしき女性に手を引かれ、
ちょこちょこと 歩いているのが、見えた。

<姉妹編> 魔女の孫の手